

# 市場の倫理

伊藤 由子

Ethics in Market

ITOH Yuko

## 要 旨

市場を「全体」として描くとどんな形式をとるべきか？ カール・ポランニーの『大転換』と金子勝の『市場』とをその観点から分析する。ポランニーは19世紀を市場経済が形成され崩壊に向かった時期と捉え、自由主義原理と社会防衛原理の争いと描く。その前の、社会に市場が埋め込まれている状態と大転換以降の社会とを、静的な理想状態とするためである。金子は彼自身の対グローバリズムの戦略を含む市場論を並べ、市場という形式をとる。

## キーワード

カール・ポランニー      金子勝      全体

## 目 次

1. はじめに
2. 全体の記述
3. ポランニーと金子勝

【参考】

【注】

## 1. はじめに

2012年10月、朝日新聞は「カオスの深淵」というコラムで「危機読めない経済学」と題して、2008年11月に英女王がロンドン大経済政治学院で「経済学者たちに」尋ねた「何気なく口にした疑問に」「激しく動揺した」と報じ、経済学者たちの役立たなさを批判している。<sup>i</sup> (朝日新聞2012年10月11日)その疑問とは、「どうして、危機が起きることを誰もわからなかったのですか?」というものだった。そして「居合わせた経済学者は、十分な返答ができなかったよう」で、翌年6月にBritish Academyはフォーラムを開催し、学者や経済界、City、そして政府の実務家が32人も集められて討論し、代表のティム・ベズリーとピーター・ヘネシーが女王に手紙を書いた。『金融市場や世界経済について多くの警告はありましたが、分析は個々の動きに向けられました。(より：引用者)大きな絵を見失ったことが、ひんぱんにありました』。そして、朝日新聞が取材したのであろう、ベズリーの言葉、「誰も全体を見ていなかった」が引かれている。ここでは「全体」とは金融市場や世界経済を指すと考えられる。しかしそうそうたる経済学者たちが「誰も全体を見ていなかった」のであろうか?

## 2. 全体の記述

女王宛の手紙<sup>ii</sup> (Besley 2009)の中には、「全体whole」という言葉は「難しいのはシステムへのリスクを全体としてみることです。」という文と、「全体としては、財政政策は経済の中のより広い不均衡をコントロールするのではなくインフレを防ぐためにだけ使われるのが最も良い、という意見が優勢でした。」という文にあるだけである。手紙では「(危機が)正確にどのような形になるか、いつ、どんな激しいものとして現れるかは誰も見ていなかった。そんな状況で大切なのは、問題の性格だけではなく、タイミングをも予測することなのです。」となっている。したがって「全体」という言葉は、記者の手紙の解釈からベズリーに発せられた質問に答えて彼が発した言葉であろう。

しかしこの「全体」は金融市場や世界経済の個々の事象すべてを網羅する、という意味ではなく、全体像という意味でしかあり得ない。そしてこの全体像というものは、個々の事象を解釈した内容ではなく、全体の「形式」を以ってしか記述はできない。<sup>iii</sup>また当然のことではあるが、「全体」とは経済社会全体のような大きな空間や近代全体といった長い時間を指す必要はなく、たとえば個人の全体像といった小さなものであってもよいのである。

「倫理」も「全体」に関する概念である。個々の共同体にあるとされるのが道徳であるとするなら、その間に生まれた市場で守られているルールがあるとすればそれは「倫理」と呼ばれるしかないものだ。そして個々の共同体に依拠する道徳ではなく、その「間」で通用するものであれば、それは他の「間」でも、したがって「全体」において通用するはずである。それはしかし、グローバリズムのように覇権的に広がるわけではない。広がる場合があるとすれば、「帝国」のように、あるいは知的・道徳的にヘゲモニーを持った共同体の道徳がたまたま買われるようになっただけだと私は考える。

### 3. ポランニーと金子勝

ここで「全体」と「形式」の2つの概念を用いて、カール・ポランニーの『大転換―市場社会の形成と崩壊―』（Polanyi 2001=2009）と金子勝の『市場』（金子1999）を分析してみよう。

『大転換』は1944年に刊行された、大部の、有名な書物である。19世紀を市場社会が形成され崩壊に向かった、自由市場主義的な流れとそれに対抗する社会防衛的な流れが拮抗する世紀として描き出し、労働・土地・貨幣を擬制商品と名付けたことで知られている。<sup>iv</sup>

金子は「本源的生産要素の市場化の限界を強調する」ために「ポランニーの考え方と類似しているという誤解」があることに立ち、彼を批判している。第1にポランニーの「擬制商品」は、「資本主義以前の人類学的考察から本来商品でないものが商品化されたという以上の意味を持ちえない」。商品との区別や、「擬制商品」を商品として流通させるために「資本主義社会が必要とする…制度やルール」の分析がほとんどない。その分析は「主流経済学の公共財の理論との違いを明確にしなければいけないからである」。つまり、金子は経済学者ではないポランニーに自身と同様の分析を要求する。注に挙げた、「紹介」の著者や後述する山下範久のみならず、大勢の人々がうけいれているのにもかかわらず、である。

そしてポランニーの弱点は「西洋近代思想への批判意識の不徹底に起因する」。まず、「歴史的認識」に問題がある。19世紀はポランニーによれば「自由放任的な市場メカニズムが実現してゆく時代」であるが、金子は「周期的な恐慌と金兌換パニックに襲われ」「中央銀行の<最後の貸し手機能>が形成された時代であった」と批判する。また、「イギリス本国における安価な政府と自由貿易主義は、もう一つの軍事財政=インド植民地財政を使った暴力的市場拡大によって支えられていた」とすでに述べたことを繰り返し、自由放任が国家によって支えられていたことを強調する。ポランニーが自由放任が国家によって実現されていたと述べていたことも付け加えられてはいる。「ベンサマイトによる中央集権的機構創出の動きを念頭に置」いているが、「ベンサマイトの改革はことごとく中途半端に終わった」ことを見ておらず、「歴史認識としては浅い」。(金子 1999) ポランニーはしかし、11・12章を割いて自由放任が国家によって形成されたこと、それに対して社会防衛は「自然に」おこった (Polanyi 2001=2009:237-272<sup>v</sup>)、と述べる。「自由放任に、自然なところは何一つなかった。自由市場は、事態の自然な成り行きに任せていたら出現しなかっただろう。」「自由市場への道は、中央によって組織され統制された絶えざる干渉行動の空前の増大によって切り開かれ維持された。」「自由放任経済は、国家による意図的な行動の産物であったが、その後の自由放任に対する制限は自然発生的な形で始まった。」「卓越した自由主義者ダイシーは、「1860年代末以降に明らかとなったイギリスの世論における」「『集散主義的 collectivistな傾向』を示すと考えられる法律が出現する以前には、世論にそのような傾向の存在を示す証拠を見出すことはできなかった」。つまり、「1860年以降の半世紀において実際に見られたような、自己調整の市場に対抗しようとする立法上の動きは、自然発生的なもので、世論の指図を受けたものではなく、純粋に実践的な精神に駆り立てられたものであったということが明らかにされた」。(同254-5) 文章にやや繰り返しは多いが、記述は明確で分かりやすい(もちろん翻訳者の貢献が大であることは言うを俟たないが)。

だが記述の分かりやすさに流されてしまってはならない。ポランニーの言うとおり、社会を防衛しようとする法律がつくられたのが「自然な」「実践的な」ものであったとして、

いったいその議会はどんな「社会」を防衛しようとしたのか？その記述が一切ないのである。18世紀、市場がまず土地や貨幣を商品化し、次いで労働を商品化する時の政治経済の動きは長きにわたって語られる。しかし「社会」の構造的な分析はない。後述するが、このような動きが始まる前の社会(あるいは共同体)についてはかなりの枚数を使って描写が行われているのとは対照的である。これはもちろん、ポランニーが社会を政治と経済とが織りなすものと考えていたからなのである。またダイシーが、「集散主義的な傾向」を示す法律を作る議会を動かす世論の存在を示す証拠を見つけられなかったことはまた、そのような世論を生む「社会」の存在を否定することにつながる。ポランニーの肯定する「社会防衛原理」が、じつはかなり観念的な、つまりポランニーの頭の中でのみ作り出された歴史解釈、つまりフィクション(=擬制)である可能性をここでは指摘するだけにとどめておこう。

そして金子がもう一つ挙げるのは、ポランニーの「新古典派経済学に対する批判的視座の欠如」である。ポランニーが「形式的」経済と「実体的」経済とに分けて(実体を取り)ながら、「『形式主義』経済学=新古典派経済学を内在的に批判することはなかった」と非難する。最初の批判点とほぼ同じであるが、この部分では、批判はポランニーの「『自由主義原理』と『社会防衛原理』の闘争というポランニーの抜きがたい二分法的枠組み」に及んでいる。すなわち、この枠組みには、「両者の相補関係—あるいは個の自己決定権と社会的共同性の相補う関係—なしでは、資本主義的経済が安定的に機能しないという視覚は見えてこない」のである。金子はこのようなポランニーの「平板な歴史観を打破するためには」、「歴史のダイナミズムを描くために設定され」た「市場とコミュニティの関係性という視覚を正面に据える必要がある」と論じる。

ここにこそ金子のポランニー批判の真骨頂がある。確かにポランニーにも「個人の自由」や「コミュニティ」への言及はある。それどころか、彼が「大転換」の後、「市場経済の消滅」の後に来るであろうと考えた社会は、「規制と管理」のもたらす「少数者のためでなく万人のための自由」が達成される社会である。そこでは「市場システムはもはやその原理においてさえ自己調整的ではないだろう。なぜなら市場システムには、労働、土地、貨幣が含まれないからである」。「賃金格差は経済システムにおいて基本的な役割を果たさなければならない…が、貨幣所得の獲得に直接関係する動機とは別の動機が、労働の金銭的側面をはるかにしのぐ重要性をもつことになるかもしれない」。「土地を市場から取り除くことは、たとえば入植農場…学校、教会、公園、野生動物保護区といった特定の組織に土地を編入することと同義である」。「今日では、すべての国で貨幣の運用権を市場から奪うことが実現されつつある。そのような目的意識なしに行われる預金創造がこの実現に大きな影響を与えた」(Polanyi 2001=2009:455-6)といった夢物語のような記述が続くが、ポランニーにとってはもちろん夢物語ではない。予測、近未来社会のあるべき姿なのである。「自由の問題は、二つの異なった次元で生ずる。すなわち制度的な次元および道徳的あるいは宗教的次元である。」、「制度とは人間存在の意味と目的が具体化されたもの」だから、「自由の真の意義を理解しなければ…自由を獲得することはできない」。制度次元では「規制が自由を拡大もするし制限もする。…そのバランスをとることのみが重要である。…これに対して、その維持が施行の意味をもつような自由というものも存在する。そのような自由は、平和と同様に、19世紀経済の副産物であったのだが、いつしかわれわれはそうした自由そのものを大切に思うようになった」。「われわれは、すでに崩壊した市場経済から受け継いだ

これらの(合流してしまった法的自由と実際上の自由：引用者注)価値ある自由を、力を尽くして何としても維持するよう努めなければならない」。(Polanyi 2001=2009:459-60)「あらゆる犠牲を払っても、たとえそれがたとえば生産の効率、消費の節約、あるいは行政の合理性という側面における犠牲であっても個人の自由は支持されるべきである」。(Polanyi 2001=2009:462)自由については最終章「複合社会における自由」で主に語られるが、そしてここでの引用はすべてこの第21章からのものであるが、歴史的な記述ではないこの章の記述でさえも、そしてポランニー自身が自らの信念を込めて語った自由についての記述でさえも「内在的」とは言えないことには注意するべきである。

コミュニティについての言及はなおさら外在的である。ポランニーは基本的には共同体 community を原始、ないし近代以前の、と言ってもポランニーの近代は19世紀にはじまると考えられるが、共同体と考えているらしく、金子の言うコミュニティという発想は全くない。<sup>vii</sup>たとえば、「この種の社会経済的原理(互酬や再分配：引用者注)が機能するのは、原始的な行為や小規模な共同体に限られると推論してはならない。互酬の原理に基づく西メラネシアのクラ交易の環は、人類史上もっとも手の込んだ取引の一つである。また再分配は、ピラミッドをつくりだした文明において巨大な規模で出現したのである」。(Polanyi 2001=2009:86)「局地的市場は、本質的に近隣市場である。そしてそれは、いかに社会(コミュニティ)の生活に重要なものであっても、支配的な経済システムを自らのパターンに変えてしまうような兆候を示す局地的市場はどこにも存在しなかった」。(同108)「競争というものが、やがては独占を導くに違いないということは、当時(15-6世紀：引用者注)もよく理解された真実であったが、独占は、それがしばしば生活の必需品に関連し、したがって容易に社会(コミュニティ)の脅威にまでなったために、のちの時代よりもずっと恐れられていた」。(同113)といった具合である。金子の言う「個の自己決定権と社会的共同性の相補う関係」が「内在的」なのはこれらが、金子自身が「はじめに一近代社会の分裂」で述べるように、「近代的人間がかかえるようになった自律性への要求と共同性への要求という分裂した要求」に根差しているからである。(金子 1999:iii)

その論理をおし進めれば、金子のポランニー批判、自由主義原理と社会防衛原理とが対立しつつ相補って19世紀(ポランニーの近代)を形成していたという発想がなければ、資本主義経済が安定的に機能しないという見解もまた、正しいことになる。この、「安定して機能する資本主義」についての考えの相違こそが、そしてそれのみが、金子がポランニーを批判する所以ではないだろうか？

ポランニーの『大転換』では、19世紀の、市場が経済システムを席捲し、経済が社会を席捲する勢いに対抗して社会が政治的に自己防衛する場面だけに動きが描写される。そしてその前後の、ポランニーが理想とするような世界では、動きはあっても矮小で社会を動かすようなものではないとされる。19世紀はそして、結局は自由を否定する破局(ファシズム)へ向かう、「我々の時代の政治的・経済的諸起源」(『大転換』の副題)なのだ。理想の「共同体」からフィクショナルな商品が舞台に現れ、主役となって、失業や投機家の自由といった「悪の系列」(Polanyi 2001=2009:464)にある自由とともに存在する、しかし同時に自由や平和といった概念を産み出した筋書きを動かし、やがて大団円を迎え(最後の筋書きは示されてはいない)、また静かな、しかし人々のライフ・スタイルは維持されている世界となる。19世紀は「自由主義原理」と「社会防衛原理」との弁証法的な闘争とでも表現してもいいだろう



う。<sup>iv</sup>『大転換』はそんなリアリズムのフィクションである。ポランニーは「諸起源」のみならず、その前後に「理想の世界」を描くことによって、「諸起源」の全体を「大転換」というフィクションの中に「埋め込んで」しまった。それが彼の形式化だった。

「動かぬ理想の世界」に市場は埋め込まれる。そこではもはや、労働も土地も貨幣も商品ではない。したがって貨幣価値とは異なった基準でそれらは測られ、計られる。生産物市場だけが市場であるような世界もまた、一つのフィクションであるとすれば、その政治性はどのようなものなのだろうか？ポランニーの答えはロバート・オーウェンなのであるが。<sup>ix</sup>

これに対して、金子の『市場』は「はじめ」から、彼のみならず全近代人が分裂を抱え込んでいる、とコンセプトの種を明かしてしまう。2部から成るこの書物は市場そのものを論じるよりは市場論批判から構成されている。「第I部では主に主流経済学を扱い、第II部では主にマルクス経済学を問題にする」。第I部で「問題になるのは、強い『自立した個人』を前提にするのか、それとも弱い『自立した個人』を前提にするのかという論点である」が、新古典派経済学・古典派経済学（とくにアダム・スミス）、そしてハイエク理論が結局は強い個人を論理に入れると（あるいは「忍び込ませる」と）、その「瞬間に、その理論は論理の裂け目を生む」。「その裂け目は、…近代的人間の分裂に行きつく」。

第II部では「市場とコミュニティの関係性という視点から、市場的領域の拡大と近代的人間の分裂の関係性」が明らかにされる。「階級概念の相対化、市場の匿名性と暴力性、市場の限界とポランニーなどが論じられ」、グローバリズムに対抗するための金子の2つの「戦略」が最後に提示される。一つは、「人々の手の届くより下位のコミュニティにセーフティネットを下ろしながら張り替えてゆくという」「時間を軸にした」戦略である。自己決定権（「職業や住む場所やライフスタイルを自ら選びとる自己決定」、とわざわざ記してある）を高めていくためには、「市場と社会の変化に応じて」「社会的共同性との相補関係を絶えず問い直してゆくこと」を基本に据えなければならない。2つ目は、「政府と市場の双方に公共空間を埋め込んでゆく」という、「空間を軸にした戦略」である。政府の改革だけではなく、「市場を自らの手に取り戻してゆく戦略」であることが重要なところである。まず、「市場では提供できないものを送り出す社会的交換のネットワークを対抗させてゆく」必要がある。つぎに、「公的部門や一部利害関係者による評価基準に対抗して、社会的交換のネットワーク自身が独自の評価機関を創りだす」必要がある。この評価機関は「透明性と開かれた参加が保障され」、①ネットワーク自身にモラルを課す自浄機能、②価格シグナルでは表せない評価基準を送り出すチャンネル機能、③市場に多元的価値を埋め込み、それを制度化してゆく機能という3つの機能を持つ。したがってその評価機関は、「市場と非市場の間に会って、自己と他者との新たな関係を能動的に作り出す」「媒介者の位置にいる」。「いる」という動詞が示すように、それは「弱い個人」の集まりなのである。

今ある制度を組み替えるだけでなく、グローバリズされた市場を「取り戻す」ためには新たな「強い」制度が必要なのである。そういうものができるならば、そこでの「基準」は内面化され、人々の「合意」を得ることも可能になって「ゆく」だろう。ポランニーとは違って、金子の場合には、理想状態はスタティックな「状態」ではなく、それ自身が市場のように動きのある、金子の表現を借りれば「ダイナミズム」を持つものである。したがって、「ゆく」という表現が多用される。

『市場』はかくして、金子の選択した「市場論」商品（もちろん彼自身の著作も含まれる「基

本文献案内)もある)の並べられた市場となった。市場はそのままに「形式化」されたのである。

#### 【注】

- <sup>i</sup> 2012年10月11日。批判するだけではなく、「経済学には期待と需要が高すぎて、うめばれるところがある。」経済学は、「脳みそのどこかへ入れておくと、問題を解決するとき、その引き出しを探せば知恵が浮かぶ。人生がちょっとだけ楽しくなる」ような学問だと思うという、斉藤誠の言葉も引いている。
- <sup>ii</sup> 1章の『 』内は朝日新聞からの引用。手紙の直訳ではなく、要約である。『より大きな絵』の前には「リスクの計算には国内外の最も優秀な数学者を使っていたが、金融の個々の動きに限られていた」とある(Besley & Hennessey 2009)。むしろ、専門家たちが互いに他の領域の人々の領土を侵そうとしなかったために全体を見なかったのであろう。
- <sup>iii</sup> この「形式」については以前に書いたのでここでは短く触れるだけにする。  
ヘーゲル『精神現象学』は主体性の〈形式〉を指示している、とジジェクは言う。それに対して、たとえばリチャード・ローティは主体性の誕生とその配備についての大きな物語だと言う。ローティはこの時「大きな物語がない」という言葉の「本質」を読み取り、ヘーゲルを、それがあった時代の人として翻訳し、表象=再現前している。ジジェクは「大きな物語はない」を受け入れる。その時代にいる彼は「本質」など読み取れない。ヘーゲルがその「序文」で強調した言葉そのままに、「形式的側面」に焦点を当て、自らもヘーゲルの形式そのものを記述=現示するのである。(拙論「ポストモダンの倫理(2)」要約)
- <sup>iv</sup> 本書英文ペーパーバック版に「紹介」を寄せたフレッド・ブロックは、「埋め込みembeddedness」という概念、つまり古典派や新古典派の主張とは反対に、「経済が…自立的なものではなく、政治、宗教、および社会的諸関係に従属するものである」という考えが「おそらく社会思想に対する彼のもっともよく知られた貢献である」と述べる(Polanyi 2001=2009:xxviii)。
- <sup>v</sup> ペンサムおよびペンサム主義者についての記述は第12章253~255ページ。
- <sup>vi</sup> これは『大転換』が著わされた当時のファシズムとの戦いを指している。
- <sup>vii</sup> 「共同体」という言葉については金子も同様、近代以前の農村共同体を指しているが。
- <sup>viii</sup> 金子は「資本主義の世界史は、ヘーゲルのいう絶対精神の自己展開として描けるものでもない。もし資本主義の世界史に具体的なイデーというものがあるとすれば、真っ先に自由主義理念を挙げねばなるまい」(金子1997:173)としている。
- <sup>ix</sup> 埋め込みの政治性については、佐藤良一・長原豊2003:325を参照のこと。

#### 【参考文献】

- 朝日新聞 2012年10月11日「カオスの深淵―危機読めない経済学」
- Besley, Tim and Hennessy, Peter 2009 Letter to The Queen *The Global Financial Crisis - Why Didn't Anybody Notice?*
- 伊藤由子 2011 「ポストモダンの倫理(2)―ローティと社会構築主義―」(松本大学研究紀要第9号)
- 金子勝 1997 『市場と制度の政治経済学』(東京大学出版会)
- 1999 『市場』(岩波書店)
- Polanyi, Karl 2001=2009 *The Great Transformation - The Political and Economic Origins of Our Time* 『大転換―市場社会の形成と崩壊―』(東洋経済新報社)
- 佐藤良一・長原豊 2003 「市場化してはならないもの―人間の尊厳」(佐藤良一編『市場経済の神話とその変革―社会的なことへの復権』法政大学出版局 所収)
- 山下範久 2009 「ポスト・リオリエント 第6回「平滑空間」と「長期持続」のあいだ」(『fatプラス』01 太田出版)